
名言なき生徒会

黒狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名言なき生徒会

【Nコード】

N3537R

【作者名】

黒狼

【あらすじ】

これはとある生徒会の活動録。今日は会長アウェイの日ですb

「ハーレムこそ男の浪漫だ！」

「それは私の役だよ！しかもそれは名言じゃないよ！」

会長をさき越して放った必殺の名言は即座に却下された。……え、これ名言でしょ？

不満気に頬を膨らませたら、深夏が一言、

「キモッ！」

「失礼な！このイケメンのどこがキモ……ごめん、認める。認めるから手鏡ださなくていいよ、真冬ちゃん。わざわざ見せなくていいから、ぐすん」

「そうですか」

真冬ちゃんは手鏡を鞆にしまい、BLと思わしき小説を再び読みだした。最近ひどいよ、真冬ちゃん。

短い沈黙の後、ごほん、と会長が咳払いをして、

「じゃあ、改めていくよ」

会長は、せーの、と小声で呟き、

「世の中みんな金なのよ」

「ちづるっううっうっうっ！……！」

またしてもさきこされた会長は涙目で知弦さんの頭をぽかぽか叩き出した。

が、知弦さんは平然と、いや、寧ろ楽しそうに微笑んでいる。それはまるで親に子がじゃれているような光景で……やべえ、會長すげえ可愛い。

「次、次おれに！」

「知弦、金鎚頂戴」

「……やっぱいいです」

うう、会長、相変わらずツンだ。

って、知弦さん。どこから金鎚出してんすか。おれそんなもの雑務力バンに入れたおぼえないんすけど。

首を傾げるおれを余所に、会長が今度こそ、と気合を入れている。そして、せーの、と音頭をとり、

「ゲームこそ文化、です！」

「いい加減にしてええええええ！！！」

キレた。再三の妨害に会長がキレた。キレて頭から湯気が出てた。なんか湯気が怒りマークを描いているように見えるのは気のせいだろうか？

ふー、ふー、と興奮状態の会長を知弦さんが宥める。

「ユリハユリハユリハ」

「わたしは牛じゃない！」

「あう、ついやっちゃんいました」

真冬ちゃんが身を縮めて、ごめんなさいです、と謝って、一応落ち着いた会長は辺りを注意深く見渡した。

「右よし！左よし！前も後ろもよし！」

なんか周囲の安全を確認していた。

そしてすうはあすうはあ、と深呼吸を始める。なんとなく会長の真似をして自分も後に続く

「すう、はあ、すう、はあ」

「すう、はあ、すう、はあ」

「すう、はあ、すう、はあ」

「すう、はあ、すう、すう、はあ」

「すう、はあ、すう、すう、はあ」

「すう、すう、はあ、すう、すう、ふう」

「すう、すう、はあ、すう、すう、ふう」

「ヒッ、ヒッ、フー」

「ヒッ、ヒッ、フー」

『ヒッ、ヒッ、フー、ヒッ、ヒッ、フー』

「ヒッ、ヒッ、って違うわよ！何でラマーズ法になってんのよ！？」

杉崎は大人しくしてなさい！」

「ハイ姉貴！」

「どういふノリよ！」

呼吸法と言ったらやっぱりあれだと思っただけだなあ。

落ち込む俺を余所に会長さんは、まったく、と呟いて、もう一度だけ深く深呼吸して、大きく口を開き、

「世界は私を中心に回っている！」

「うえええええんんん！！！」

泣きだした。号泣しての胸の中に飛び込んできた会長を知弦さんが、よしよし、と頭を撫でて慰める。つて、

「いつの間に入ってきたんですか、真儀瑠先生^{まぎる}」

「言っただろ。世界は私を中心に回っているんだ。私はどこにでも存在する」

「いや、怖すぎますから」

気づけば窓際に真儀瑠先生が立っていた。この人、忍者か？
こんな人があちこちにいたら途轍もなく嫌だ。
ちなみに会長はと言えば、

「うえええええんんん！！！」

まだ泣いていた。だんだん知弦さんの撫でる手がおざなりになってきた。

あ、ため息ついた。飽きてきたんだな。

「次、次おれに」

「知弦、金鎚」

「ごめんなさい。やっぱりいいです」

一瞬で泣きやむ会長。……そんな嫌ですか？俺の撫で撫で。名残惜し気に手をブラブラさせていると、

「おお、杉崎。肩を揉んでくれるのか。そうかそうか。では頼む」

なぜか真儀瑠先生の肩を揉むことになった。……まあ、いいけど。

「わっせわっせ」

「ほう、上手いじゃないか。いいぞ……ああん、そこお」

「うおおおおおおお！！！！」

「あん、や、あ、あ、そこ、もつとお。い、いいのお」

「ここか！ここなんだな！」

「いい、あ、あ、あ。あん！」

「やめ！変な声出さない！杉崎も興奮しない！」

俄然やる気出てきた所で会長がストップをかけてきた。

「別に肩を揉んでいただけですよ？」

「そうだ、何を怒っているんだ？」

「先生が変な声を出すからよ！」

噛みつく会長に真儀瑠先生がニヤリとした。

「ほお、例えばどんな？」

「え、その、あ、ほら、えと………い、言えるわけじゃないの！！！！とにかく肩揉み禁止」

『えええええ』

「えええええ、じゃない！杉崎！会長命令！」

「はあ……では、真儀瑠先生。また後ほど」

「ああ、また後でな」

「駄目だからね！」

真儀瑠先生から離れて席に戻ると、会長は、むっとしつつも、咳払いをして本日の名言を、

「・・・あれ？なんだっけ？」

忘れてしまっていた。

……その後、悩み続ける会長を置いて、俺達は生徒会の仕事を始め、結局下校時間となっても会長は思い出すことはなく、きょうは珍しくも名言のない日となった。

「あれ？あれ？なんだっけ？あれ!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3537r/>

名言なき生徒会

2011年10月6日09時45分発行